

日本災害情報学会「廣井賞」「阿部賞・河田賞」

(廣井賞表彰審査委員会 2015 年度幹事 岩田孝仁)

2015 年表彰式・受賞記念講演：2015 年 10 月 24 日 甲府市総合市民会館（芸術ホール）

1. 表彰式

災害情報分野で著しい功績のあった会員又は会員所属団体等を表彰する「廣井賞」の表彰式と受賞記念講演が行われた。

今年度の「廣井賞」には学術的功績分野において京都大学防災研究所教授の矢守克也氏が選ばれ、賞状と賞牌が授与された。表彰式は、布村明彦会長の挨拶に続き、廣井賞表彰審査委員会の田中淳委員長から選考の過程と受賞者の紹介が、入江さやか氏の軽快な司会進行で行われた。

学会大会最終日には、昨年度から新設された若手奨励賞として、優秀なポスター発表に対して「阿部賞」が 2 名に、優秀な口頭発表に対して「河田賞」が 5 名に贈られた。

◆廣井賞「学術的功績分野」

受賞者 京都大学防災研究所 教授 矢守克也 氏

氏は、社会心理学をバックグラウンドとして災害と人の関わりに関して念入りなフィールドワークに取り組み、客観的な視点から「防災人間科学」という新たな学問分野に発展させてきた。その成果は多くの著書として世に示すほか、防災教材として広く知られる「クロスロード」「ぼうさいダック」「個別避難訓練タイムトライアル」等の開発を通じた防災教育分野の業績も大きなものがあり、これらの活動は災害情報研究の発展に大きく貢献してきたことから、今回の受賞となった。



◆若手奨励賞「阿部賞」「河田賞」

…10 月 25 日の学会大会最終日に表彰…

「阿部賞」は、ポスター発表会場における会員の投票で、以下の 2 名に贈られた。

・廣井悠 (名古屋大学減災連携研究センター)：大都市複合災害避難シミュレーションの提案

・鈴木比奈子 (防災科学技術研究所自然災害情報室)：「水害地形分類図デジタルアーカイブ」の構築

「河田賞」は、口頭発表会場の各座長や学会理事、廣井賞表彰審査委員らの選考で、以下の 5 名に贈られた。

・小谷稔 (神戸大学大学院工学研究科)：ワイブル分布を用いた災害死亡者数のベイズ推定モデル

・竹之内健介 (三重県)：生活防災タイムラインを通じた災害対応に対する住民意識の変化

・佐藤翔輔 (東北大学災害科学国際研究所)：ソーシャルセンシングによる被災地の被害状況と支援ニーズの把握の可能性—東日本大震災の発生前後に発信された Twitter の分析—

・倉田和己 (名古屋大学減災連携研究センター)：仮想現実ソフトウェアと震動体感環境の融合による効果的な減災啓発ツールの開発

・杉山高志 (京都大学大学院情報学研究科)：夜間における津波避難の課題 (その 2) —伊予灘地震の実態調査と夜間避難訓練の分析

受賞された 7 人の皆さんの今後のご活躍を期待するとともに、昨年より多くの会員が投票に参加していただいたことに感謝します。

2. 「廣井賞」受賞記念講演

「温故知新」—廣井先生の言語行為論の論文から—

京都大学防災研究所 教授 矢守克也

私は、廣井先生の門下生ではありません。しかし、このたび、先生のお名前を冠したすばらしい賞を頂戴することになりました。お礼の気持ちを込めて、廣井先生のお仕事を振り返ってみました。そして、先生が 31 歳の時に執筆された「言語コミュニケーションに関する一考察」という論文を発見しました。この論文には、災害の「サ」の字も登場しません。災害情報の研究に入る前、基礎的な仕事をされていた頃の論文で、言語論 (言語行為論) に関するものです。

私はこれまで、主に防災教育の分野で、ご覧のような実践的で具体的なプロダクトを公表しています (図 1)。しかし他方で、今、田中淳選考委員長からお褒めの言葉 (笑) を頂戴したように、「防災哲学」(?) と映るような仕事もしてきました。月並みですが、現場での実践と同時に、理論的な仕事も大事だと思っているからです。この意味で、この論文に関心をもったわけですが、もう一つ、本論文は、災害情報に関する現実的な課題にも重

遂行文としての災害情報とを連携させるための鍵を握っています。実際、そうした試みはすでにくつか始まっています。たとえば、片田敏孝先生が群馬県みなかみ町で展開してきた、地域住民全員が「危険感知センサー」となる取り組みや、三重県伊勢市宮川沿岸地域で竹ノ内健介くん（三重県庁）が推進している「地域気象情報」の試みなどです。

これらの試みの中核は、宣言文の形式を利用することで、片田先生の言葉を借りれば、地域の人たちに自主的な「モードチェンジ」を行う気持ちや能力を醸成している点です。竹ノ内くんの事例で説明しましょう。ここでは、地元の気象台、伊勢市、河川管理者、そして地域住民が合同で、どういう条件下でみんなが警戒モードに入るのかが予め決められています。この条件には、気象台などが出している公的な情報と、住民自らが独自にウォッチする事象の両方が含まれます。

警戒モードに入ったら、みんなで、たとえば「宮川の氾濫に注意しよう宣言」を出して予め決めておいた対応行動を実際に始めます（なお、宣言は他にも数種あります）。会議が終わりそうだという空気感のなかでこそ「会議を終わります」が有効であるのと同様、「そろそろ氾濫に注意しよう宣言が出るぞ」という空気感の共有こそが重要です。このプロセスをすっ飛ばして、いきなり大雨警報（記述文）や「避難してください」（遂行文）が天から降ってきても、それらは効果を発揮しきれないわけです。

言語行為論は、今、災害情報が直面する具体的な課題とは何の関係もない抽象的な議論に見えるかもしれませんが、しかし、現状を根本から変える処方箋は、多くの場合、現場での格闘だけでは出てきません。「温故知新」を実践して時には故きをたずね、概念的な議論を補助線にした思考が必要です。

廣井先生の威を借りて僭越な言い方もたくさんしましたが、災害情報研究の今後を展望するような話題にしたと思って、お話しさせていただきました。ありがとうございました。

